

代の窯跡と対比できる。この時期には窯体の全長が10mをこえるも窯はない。塚ノ谷第1号窯、第2号窯は第V期から第VIA～B期に属し、全長は9m弱、窯床の傾斜は38°である。ついで第VIC期に比定される牛焼谷窯跡は全長5.4m、床面傾斜40°を測り、にわかに全長が短くなる。窯巾、傾斜はさして変わらないところからみると、窯の全長短縮はきわめて顕著な変化である。加えて立地が尾根近くの高所を占め、床面傾斜が大きいことも、第III期の窯跡に対比して注意すべき変化である。このような傾向は8世紀代まで継承されたようで、管ノ谷第1号窯、第2号窯では全長5～6m、傾斜も40°をこえている（第1号窯は22°）。この時期には窯巾が小さくなるところに7世紀代との相異をみることができる。尾根近くの高所を占める立地はひきつがれている。結局7世紀から8世紀への推移は窯体の小形化という点に示されているといえよう。管ノ谷第1号窯における床面の緩傾斜は立地した地形の傾斜に帰せられるであろう。立地の高所移動と床面の急傾斜に示される7～8世紀代の窯跡は谷をわたって吹きあげてくる風向を考慮して風力を強化することに起因する生産の自然的条件をよりよく利用するための改良であったのであろう。ただ地下式無段登り窯の形態は、八女古窯跡群の上限から終末までを通じて踏襲されていた。これは須恵器窯の基本的形態であったであろう。生産品についてみれば、須恵器のほか第V～VIA・B期には円面硯の生産があわせみられ、第VIC～VII期には屋瓦の生産があわせ行なわれていた。陶瓦兼業生産は、北九州地方ではすでに須恵器の第IV期から開始されているが、八女地方では未だ8世紀代の屋瓦を使用した遺跡が知られていないので、円面硯とともにその探索が将来にのこされることとなったが、これらの供給先がつきとめられるならば、八女古窯跡群の性格は一層明確になるであろう。

（小田富士雄）

Ⅱ 筑後における須恵器の編年—窯跡と古墳—

八女古窯跡群の須恵器編年の大綱はすでに調査報告Ⅰにおいて発表されている。今回八女古窯跡群調査の一応の終了にあたって、その後の調査資料によって前回編年の欠を補うとともに、周辺をも含めた地域の古墳出土須恵器を検討し製品の需給関係にまで敷衍してみたい。

調査報告Ⅰの刊行後に調査された須恵器の窯跡は、第III A期の須恵器を生産した中尾谷窯跡群および第VII期に属する須恵器をもつ管ノ谷窯跡群である。前者が灰原のみの調査をも含めて4基、後者で2基が発掘された。これら一連の調査によって調査報告(1)で不明であつた時期が補充され、第III期～第VII期までがほぼ明らかとなった。しかしながらいまだに第IV期須恵器を生産した窯跡の所在は、確かめられておらず今回も空白のまま残さざるを得ない。なお、窯跡出土資料による編年については、調査報告Ⅰより要約・引用した部分があることをあらかじめお断りしておく。

さて、筑後地方の須恵器の編年において八女市岩戸古墳出土資料が欠かすことのできないものであることは、これまでに何度も述べられている。岩戸山古墳が筑紫国造磐井の墳墓であるということとは現在ではほとんど疑う余地のないところであり、日本書紀の記述によれば磐井は継体天皇の21年(527)に叛乱を起し翌年官軍によって誅される。岩戸山古墳の別区と研人の存在がこれを磐井の墳墓に比定する確証を与えたが、ここで発見された須恵器もまた須恵器編年に確実なよりどころを与えるものであった。そしてこの観点から岩戸山古墳出土資料を須恵器編年の第II期として位置づけたのは

樋口隆康氏¹⁾であったが、これは現在でも筆者らが踏襲して、編年上の基準となっている。今回の一連の発掘調査を通じて、岩戸山古墳出土の第Ⅱ期資料²⁾に相当する窯跡まではついにつきとめることはできなかった。岩戸山古墳は大正末年に大神宮祠を新築した際に墳丘から出土したもので、かなりの量の須恵器・石人・埴輪円筒などが知られていた。しかし大戦後の混乱によって大部分が散逸し、現在残っているものは少ない。管見にふれた須恵器資料については、調査報告Ⅱでとりあげた今回その後の資料を載せることができた。しかしながら掲載した資料のすべてが必ずしも第Ⅱ期に属するものではなく時期の降る資料を含むことは注意しなければならない。第Ⅱ期の資料として確実なものは4個の大型器台をあげうるのみである。2種類あって、1つは大型受皿に脚のつく形態のものでこれが3個分ある。残りの1つは、小型の受皿部に柱状部が接続しこれに円錐台形の脚部がつくものである。前者の脚は長く発達し中央部で最も細くなって裾がラッパ状に開いている。脚部にはいずれも櫛状施文具による整美な波状文が施されている。

さて、次に第Ⅲ期の須恵器では八女古窯跡群でこれまでに調査された資料からあげることができる。このうち4基の窯の存在が確かめられた中尾谷窯跡群は第Ⅲ期前半に位置すべき古式の特徴を有するものであり、後半の資料として塚ノ谷第4号窯跡がある。また、調査以前の蒐集資料には中尾谷窯跡群と同時期に比定すべき三助山窯跡群出土資料がある。三助山窯跡群は地元の岩崎光氏の調査によるもので、その蒐集資料には第Ⅲ期から第Ⅵ期の須恵器までを含み十基ほどの窯の存在が考えられている。

第Ⅲ期須恵器の特徴は、杯・高杯・甕・提瓶などに顕著である。中尾谷窯跡群の須恵器でみると杯の蓋は天井部と体部との境に退化した段あるいは沈線をつくり出し、口縁内側には古式の特徴である斜の段がある。杯身は蓋受けの立ち上りはまだ高いがやや傾斜してくる。また蓋受けのつくりが薄手になって古式にみられる力強さが失なわれるとともに口縁端の段もなくなる。総じて全体の形にこんもりとしたふくらみが消えて次第に扁平な傾態へと傾いてゆく。そして後述するようにこの時期の後半から高杯・甕などに小形化の傾向が現われるのであるが、杯では一足さきに小形化が認められる。杯の口径でみるならば例えば、同時期の須恵器を生産した福岡県野添6号窯³⁾では13~14.5 cm、第Ⅳ期前半に比定される福岡県小迫窯⁴⁾では11~12 cmであるのに対して、中尾谷窯跡の場合10~13 cmで11 cm前後が圧倒的である。また中尾谷窯につづく形式の塚ノ谷第4号窯跡の場合も9~11.5 cmとこの小形の傾向は受けつがれている。杯の身でみる限りではこの小形化の傾向を除けば中尾谷窯跡群資料と塚ノ谷第4号窯跡資料との間にはほとんど形態差はみられず、第Ⅲ期後半になっても蓋受けの立ち上りは高い。蓋には肩の段がなくなって口縁の仕上げも丸くなる。

高杯には有蓋と無蓋の区別があり、有蓋式のものには第Ⅱ期に出現する長脚式二段透しを有する大形品の系統をうけたもので、蓋も古式の特徴をよく継承している。これに比べ無蓋高杯はやや小形となり、一段透しと二段透しがある。有蓋高杯は塚ノ谷第4号窯跡では確認されていない。そして塚ノ谷第4号窯では第Ⅲ期後半の時期を特徴づけた小形高杯の出現がある。これは、甕とともに一見塚ノ谷第4号窯跡における時期差のように感じられるもので、第Ⅲ期前半と明らかに一線を画する材料である。杯部口径・高さともに9 cm前後で製品に規格性がみられる。脚に円形小孔を穿った1例があったが他に透しをもったものは発見されていない。杯部外面下半に何本もの沈線状装飾を施したり、

脚中央にも1・2条の沈線がめぐらされたり、螺旋状に入れられたりする。

甕は、中尾谷窯の製品では大きくラッパ状に開いた口頸部をもつ通常の形態のもので、段を作って径を拡大する口縁部にいくらか違いがあるが、斜めに立ち上る形態よりも横に広がって口径を拡大する傾向のものが多くある。頸部にはこまかい波状文が施されている。ところが塚ノ谷第4号窯では通常の大きさの甕は1例も発見されず、かわって口径8.5cmほどの口頸部をもつ小形甕が登場する。口頸部を沈線によって三区に分け、上部二区に大きめの波状文を施し、最上段がやや径を拡大した形になっているが屈曲は小さい。口縁内側には古式の坏などにみられる段がつくられている。この小形甕と先の中尾谷窯跡資料とは形態的にただちに結びつけることはできないが、三助山出土資料をもってその推移をとらえることができる。

その他の資料では、提瓶・壺・甕などにおいてその口縁部断面を外側に肥厚させ、沈線を加えるなどの共通した特徴が前・後半を通じてみられ、とくに口唇部上面を水平に仕上げる癖は前半のものに多い。提瓶はこの時期の後半に側面観で一方が扁平となり、また平瓶が登場する。さらに後半には坏で蓋受けのある形態の他に蓋受けのない器種があらわれる。これには高い身受けをもつ蓋がともなう。大形器台は中尾谷窯跡で小破片が発見された。

以上みてきたように第Ⅲ期須恵器の特徴は第Ⅱ期須恵器に通じる古式の残存と新式への移行という現象で理解することができ、この違いを窯単位にセットとして把握できたことで前後に区別した。A・B=小期に分けた所以である。A期には坏・高坏など第Ⅱ期の特徴を受け継ぐものがあり、B期ではこれらが消えて小形化した製品が主流をなすに至る。すなわちここに第Ⅳ期以後一般化する小形・粗製化への萌芽を感じとることができ、急激に進行する量産の傾向を反映したものとみられる。さらに坏の小形化で他地域との比較をみたように八女地方では、この傾向がほぼ半形式早く現われるようである。

第Ⅳ期の須恵器を生産した窯跡はまだ発見されていない。前段階での特色ある傾向がどのように継承されてゆくのか、きわめて興味深い問題である。福岡県大浦窯跡ではこの時期の後半には坏は口径9cmにまで小形化しており、またこの時期には身と蓋の転倒がおこることが知られている。

第Ⅴ期の資料は塚ノ谷第1号窯跡須恵器の大部分が相当する。蓋坏では第Ⅲ期にみられた身に蓋受けのある種類は消滅して、かわって第ⅢB期塚ノ谷第4号窯跡で登場した身受けかえりをもつ蓋をともなう平底の坏が主流をなす。形の大きさに大・中・小の三種がある。第ⅢB期との相違は、この時期になって厚手づくりになり、蓋では内側につくかえりが小さくなっている。その他の器形も第ⅢB期から系譜をたどることは容易である。しかし、手法および胎土焼成などの観察において両者は明らかに相違しており、第Ⅴ期では厚手のつくりになるばかりでなく胎土に細砂粒を含む割合が多くなり器肌が粗くなる。第Ⅲ期に一般的であったヘラ削り手法も少なくなつてカキメ整形、撫でが行なわれることが多い。

一般に各時期を通じて蓋坏が最もよく時期の特徴を示している傾向があるが、第Ⅲ期のなかで進行してきた小形化の傾向が、他地域の例でみるように第Ⅳ期においても継承され、さらに第Ⅵ期では小形の形態がなくなることから考えれば、第Ⅴ期の蓋坏にみられる三種の大きさの存在は第Ⅳ期をうけて小形→大形への推移を考えることができよう。

第Ⅵ期の須恵器の特徴は歴史時代に普遍的となる高台付碗の出現であり、杯から碗へ転換する時期として重要な位置を占める。この時期の資料としては、塚ノ谷第1号窯跡の製品の一部と第2号窯跡さらに次期との過渡期にあたる牛焼谷窯跡の資料がある。この時期は蓋の形態、とくに身を受けるかえりや、短かく下降させた口縁部のつくりによって三種の変遷をたどり得る。すなわち形の上で大形となって第Ⅴ期とは分離されたが、なお第Ⅴ期と相似た身受けかえりを有する塚ノ谷第1号窯資料（A式とする）に比べて、塚ノ谷第2号窯資料では撮みが扁平な鉤状となり、身を受けるかえりが次第に小さくなって退化してゆく傾向があり（B式とする）、これがさらに身受けのかえりがなくなって口縁部付近で急に折れ下って直角かそれに近い角度の口縁を形成する。この形態から急に蓋の扁平度が目立ってくる（C式とする）。これら蓋の変化に対応して碗の方でもわずかながら相違がみられる。塚ノ谷第1号窯資料にみられたやや長目の付高台が、斜めにはね上り気味に張り出すくせがなくなって、塚ノ谷第2号窯資料では下端面が完全に平面に接触するようになる。また器壁の厚みがほぼ一定に作られるようになることも技術的進歩を裏づけるものとして注目される。このように第Ⅵ期の蓋付碗の変遷をA→B→C三種たどることによって、第Ⅶ期の蓋付碗の出現は容易に導き出せよう。

蓋付碗以外には杯・高杯・盃・壺・提瓶・平瓶・大甕・鉢・皿などの器形が知られている。

塚ノ谷第1号窯をはじめとするこの時期の三つの窯で、特筆すべきは、塚ノ谷第1号・第2号窯における円面硯・牛焼谷窯での瓦の生産である。塚ノ谷第1号窯では第Ⅴ期から操業されており、円面硯の製作がどの時期から行なわれたのか明らかにし得なかったが、塚ノ谷第2号窯出土資料とは形態的にやや相違がみられ、第Ⅴ期までさかのぼる可能性も考えられている。いずれにせよ窯跡出土の円面硯としては九州では最古式に位置づけられる貴重な発見であった。

牛焼谷窯における瓦の生産は、須恵器の製作に引きつづいて行なわれたもので、出土須恵器の形態は第Ⅵ期後半～第Ⅶ期にかかる特徴を示している。ここで作られた瓦は行基葺丸瓦と平瓦があり、軒先瓦などの瓦当文をとまう資料は発見されていない。

第Ⅶ期の資料は管ノ谷第1号窯・第2号窯の須恵器が相当する。いずれも灰原の大部分を欠失しているため採集できた資料はごく限られたものであったが、器種全体の組合せからみてここでも二小期に分けることが可能である。すなわち、第2号窯→第1号窯の順に操業されており、第Ⅵ期同様高台付碗の蓋の変化に着目するならば、第Ⅵ期C式にみられた口縁部が直角に近い折れ曲りで短く下降した形態から、奈良時代を通して行なわれる代表的な形態である鳥の嘴状に断面三角形のごく短い下降部をつくるもの、さらにこれの退化形とみられる丸く仕上げたり下降部をもたないものに分かれる。碗では前後の時期で目立った変化はないが口径の大形のものが一般的となる。器種では碗・杯・皿・高杯・壺・甕などが作られ、第Ⅵ期以前のいわゆる古墳時代須恵器に比べ器種の減少が認められる。また第1号窯を第2号窯より降る年代の操業とみてこの時期の後半におく有力な材料となったのは、第1号窯出土の大形浅い杯をもつ高杯と胴部に凸帯を有する壺の存在であった。さらに第1号窯からは断片資料ではあるが瓦も発見されている。第Ⅶ期資料は量的にも器種の上からも十分とは言えず今後の資料の増加に期待するところが大きい。

以上、窯跡出土資料を中心として須恵器の変遷をみてきたが、これを実年代に対比するならば第Ⅱ期は岩戸山古墳の築造された前後の時期—6世紀の前半—があたり、第Ⅲ期が6世紀中葉から後半に

およぶ時期、第Ⅴ期が6世紀終末から7世紀の前半代にかけての時期、第Ⅵ期は7世紀後半代を中心とする時期にそれぞれ比定されよう。

さて最後に八女古窯跡群で生産された須恵器の需給関係についてみてゆこう。

八女市周辺の数ある古墳群のなかでも出土須恵器がはっきりしている古墳は意外に少い。これまで調査報告Ⅰ～Ⅲにおいて八女古墳群の須恵器集成を企画したのも結局散逸した資料を寄せ集めて八女古墳群の全体像を把握するとともに、個々の古墳と窯跡との需給関係にまで踏み込まんとする目的に外ならなかった。表は管見することのできた出土須恵器の形式からみた八女古窯跡群と周辺の古墳との対比である。

これらの古墳のうち窯跡出土資料とまったく符合する特徴を有する須恵器をもった古墳がいへつかある。塚ノ谷古墳、牛焼谷3号墳などがそれで、調査には筆者も参加した。塚ノ谷古墳では追葬が行なわれていて第ⅢB期の坏および第Ⅵ期後半の埴が発見された。これらの資料はそれぞれ塚ノ谷第4号窯跡、塚ノ谷第2号窯跡出土の資料とまったく同一と言えるものである。塚ノ谷古墳はそれら二つの窯と100m以内の距離にあり、被葬者についても窯業とかなり密接な関係を有する人物ではないかと考えられている。

次に牛焼谷3号墳についてみると、須恵器は墳丘裾より発見されたもので、坏・小形高坏・甕・甔などの器種がある。坏は蓋受けのつく形態のものと、身受けえりを有する蓋をともなう平底風の形態のものとの2種類がある。この2種類の坏と高さ9cmほどの小形高坏とは塚ノ谷4号窯の製品である。しかし甕についてはやや古い特徴を有するもので同窯跡からは発見されていない器形である。また塚ノ谷4号窯出土の小形高坏とまったく同形の土師高坏も含まれている。ここではいくつかの窯の製品の寄せ集めの状態をみる事ができた。牛焼谷古墳群ではほかに1号墳・2号墳でも第ⅢB期の坏などの須恵器が出土しているが、これらの資料は塚ノ谷4号窯の製品とみることはできず、あるいは三助山窯のものかとも考えられる。さらに1号墳では追葬が行なわれて第Ⅵ期前半の須恵器があるが、これは塚ノ谷第1号窯の製品と同一のものである。牛焼谷古墳群の場合も塚ノ谷窯跡群と距離300mほどのきわめて近い位置に営まれた古墳群である。

形式	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ
竪 跡		中尾谷第1号竪跡 第2号竪跡 第3号竪跡 第4号竪跡	塚ノ谷第3号竪跡 第4号竪跡	塚ノ谷第1号竪跡	塚ノ谷第2号竪跡	牛城谷竪跡 → 竪ノ谷第2号竪跡 ← 竪ノ谷第1号竪跡
古 墳		三助山竪跡 ← 早戸山古墳 東場古墳 善蔵塚古墳 → 平原・日当山古墳群 豊福6号墳	→ 銅崎第3号墳 → 平原・日当山古墳群 塚ノ谷古墳 牛城谷1号墳 牛城谷2号墳 牛城谷3号墳		三助山竪跡 → 平原・日当山古墳群 牛城谷第1号墳	塚ノ谷古墳
		← 鈴ヶ山1号墳 ← 鈴ヶ山2号墳 ← 山の前2号墳 ← 山の前3号墳	→ 鈴ヶ山1号墳 → 鈴ヶ山2号墳 → 山の前1号墳 → 山の前2号墳 → 山の前3号墳			

出土須恵器の形式からみた八女古窯跡群と古墳との対比

これらは窯跡に非常に接近した古墳であったが、最近の調査によってやや遠い古墳にまで供給が及んでいることが知られた。窯跡群から西へ5～6kmほど距てた八女群広川町に所在する鈴ヶ山古墳群・山の前古墳群⁵⁾がそれで、報文によって知る限りでは鈴ヶ山1号墳・同2号墳・山の前2号墳などの出土資料中に、中尾谷窯群・塚ノ谷第4号窯資料ときわめて類似したものがあり、報告者も指摘している。これらは器形の特徴ならびにヘラ記号から導き出されたものであってほぼ誤りのないところであろう。第V期の資料については現在までに八女古墳群の中に符合すべき資料を見出すことはできない。

これまで窯跡出土資料に対比できる須恵器をもつ古墳をいくつかみてきたが、須恵器が限られた地域のみで生産される特殊な製品でないことから、現在の段階では製品の広がりについて問題とすることはできるが、例えば1古墳が寄せ集めの状態で須恵器をもっている場合に、1つの窯の製品と被葬者の関係を問題にすることはきわめて困難である。6世紀中ごろの時期になると埋葬時の祭器としての需要から一般の生活へ須恵器が浸透してゆくことが考えられ、このことから副葬品にみる寄せ集めの状態も説明されよう。したがって、古墳へは2次的に集められた形になる場合もあることは十分考慮されるべきである。現段階では製品の広がり一点一点をおさえてゆく作業を根気よく続けねばならない。

(真野 和夫)

註1) 水野清一・樋口隆康・岡崎敬「対馬」1953

2) 調査報告Ⅱ・Ⅳ

3) 小田富士雄・柳田康雄・真野和夫「上大利野添大浦窯跡」福岡県教育委員会 1970

4) 小田富士雄・真野和夫「小迫窯跡」北九州市教育委員会 1972

5) 西谷 正ほか「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ」福岡県教育委員会 1972

Ⅲ 埴輪生産の諸問題

八女古窯跡群の継続調査中に立山山窯跡の発見があり、これが埴輪生産窯跡であったことは調査団を驚ろかせたし、また関係方面の人々の関心を高めたのであった。九州地方における埴輪窯跡の発掘調査は、これがはじめてのことであったが、また埴輪窯跡の発見自体が西日本では稀有のことに属していて、その意味からも世間の興味をひくに十分であった。九州地方の埴輪研究の将来に与える影響も少なくないと考えられるので、この機会に八女地方における埴輪生産をめぐる二、三の問題をとりあげて、今後の研究に資することにしたい。

埴輪窯跡の研究概要

古墳の墳丘に象形及び円筒埴輪をめぐらすものは少なくないし、また古墳時代の研究上に占める埴輪研究の位置は重要なものがある。すでに埴輪に関する研究は多く出されているが、その生産遺跡に関する研立となるときわめて少ない現状である。これまで報告されている埴輪の製作工房、窯跡に関するものは東日本の実例がほとんどである。東日本の埴輪生産遺跡の調査は明治39年、柴田常恵氏の群馬県藤岡市本郷における埴輪製作竪穴の発見にはじまる¹⁾。柴田氏は「和名鈔」にみえる土師郷の